

J **apanese text**

2016年 秋/冬号 日本語編

インタビュー

アーティスト・インタビュー

上妻宏光

——文化を繋ぐ革新者

撮影=八田政玄

文=岡崎 香

p.052

16世紀に日本に伝わった中国の三弦^{さんげん}をもとに改良され、江戸時代の初期には現在の形になったといわれる三味線。上妻宏光さんは、フレットがない細長い棹^{さお}と3本の弦を持ち、撥^{ぼち}を用いるこの日本を代表する弦楽器の可能性を、様々なジャンルのアーティストとコラボレーションしながら切り拓いてきた“三味線プレイヤー”だ。3つに大別される三味線の中でも、最も大きな太棹^{ふとさお}三味線で名を馳せ、国内外での演奏活動を展開。作曲家・編曲家としても活躍している。

「三味線は本来、唄や語りや踊りの伴奏楽器。それでいて音の個性が強いので、実は、他ジャンルの楽器や音楽とは混ざり難いんです。でも、その個性的な音が魅力でもある。さわり(最も太い“一の糸”の糸巻き近くにある一種のノイズのような残響音を出す仕掛け)があったり、撥で叩きつけるように打ち鳴らす音や、糸が擦れる音、平均律では表せないような繊細な音や間合いも非常に大切にされていて、音の情報量が多い。そういった細やかな情感や情景を表現できる邦楽器特有の音の豊かさや、三味線とともに発達した粋な“お座敷文化”を、次の世代に繋いでいきたいなと思います」

そう話す上妻さんは、趣味で三味線を弾いていた父の影響で三味線に興味を持ち、6歳で津軽三味線の師匠に入門。数々の大会で優勝し、海外等でのジャンルを越えたセッションで注目を集め、2000年からソロ活動を開始。2001年にアルバム『AGATSUMA』でメジャーデビューを果たした。

「全ての活動のベースにあるのは、自分が大好きなこの楽

器を、どうしたらもっと広めていけるだろう? 楽しめるだろう? という思いです。というのも、自分はこんなにも三味線はカッコイイと思っているのに、世の中ではそう認知されていないという現実を、小学生の頃から実感していたから。小学校を卒業する頃には、三味線で色々な音楽に参加して、海外でも絶対に自分のコンサートをやってやろうと強く思っていました。三味線やってるの!?!と珍しがられるのではなく、それが普通のことだと思われるような環境、状況にしたいですね」

その信念のもと、三味線をアコースティックで聴かせるソロコンサートや日本各地の民謡のアーカイブ等、様々な活動を展開している上妻さん。その一つが、自ら進行役を務め、伝統芸能はもとより、日本文化に誇りを持って国際的に活躍しているジャズやポップスの音楽家、ダンサー等、多彩なジャンルのアーティストを紹介・共演する公演『日本流伝心祭 榎一クサビー』だ。すでに国内で5回開催しており、ゆくゆくは海外公演を行い、日本から連れて行ったアーティストと現地のアーティストの共演も実現したいという。また、上妻さんが演奏し、シテ方金春流能楽師・山井綱雄さんが舞い、邦楽にも詳しいロックミュージシャンのデーモン閣下が朗読を務める能舞音楽劇『義経記』も、2013年から日本各地で公演を続けている。

そんな上妻さんの活動テーマは「伝統と革新」だ。

「何事も、伝統を守る一辺倒だと、やがて先細りします。新しいことにトライしていく中で、時間をかけて淘汰されたものが伝統になっていくわけで、今の伝統文化も、かつては新しいことだったはずだから。海外の様々なアーティストとの共演にも、そんな気持ちで臨んできました。今後は、三味線が表現し得る音を追求し、世界に広めていきつつ、日本の伝統文化をいい形で世界にアピールしていきたいです。和の文化全体を俯瞰で眺め、各分野の皆さんと連携しながら、自分の芸をひたすら深く追求しているその道のスペシャリスト達を繋いで、輪を作りたい。点が繋がったその輪=和の中で、縦横無尽に遊べたら最高ですね(笑)」

能舞音楽劇『義経記』

3月10日 関市文化会館（岐阜）
 3月18日 鹿屋市文化会館（鹿児島）
agatsuma.tv/

アートミックスジャパン 2017

『上妻宏光／沖仁（フラメンコ・ギタリスト）』コンサート

4月2日 新潟市民芸術文化会館コンサートホール（新潟）
 「アートミックスジャパン」は、2013年より新潟で毎年4月に開催されている和の祭典。日本の伝統芸術を新潟市内の様々な文化施設を使って23日間にわたって紹介する。
artmixjapan.com/ticket/

（写真）

上妻宏光 日本流伝心祭クサビ 其ノ五
 一伝統と革新一 “頂 ITADAKI” (2017年)
 ©小原泰広

藤田理麻

——行動する画家

撮影＝西山 航
 文＝清水千佳子

p.054

海外生活が長い人特有のちょっと巻き舌のしゃべり方、気持ちいいほどに明るい笑い声。藤田理麻さんはアメリカ在住38年目の画家だ。「幼い頃からお絵描きが大好きだった」という彼女は、親の転勤でニューヨークへ越すと、私立の進学校を経てパーソンズ・スクール・オブ・デザインへ。在学中に現在の絵のスタイルを確立する。「最初の2年間、きれいに整った線画ばかり描いていたら、つまらなくなりました。それで黒い紙にオイルパステルで色を重ねて“線を残す”描き方をしてみたら、いびつな線が生まれて味が出て。以来、ほとんどの作品をこの方法で描いています。これは日本的な考え方だと思いますが、欠けた部分があるからこそ、人も物も美しいと私は思うんです。金継ぎをした器など不完全なものに美を感じます」。

転機となったのが、3つの不思議な体験だ。1993年、日本からの長いフライトを終えて JFK 空港に到着したとき、藤

田さんは風邪の高熱でふらふら。タクシーに乗りたいが、うかつにも米ドルが手元にない。途方にくれていると、どこからともなく現れた見知らぬ女性が必要なお金をくれた。お礼を言おうと思ったときには姿がない。そして、その数か月後、書店で1冊の本が足もとに落ちてきて、開いてみると見知らぬ人に助けられた人たちの体験談を集めたものだった。それからまたしばらくして、今度は「夢のお告げ」が届く。「チベットののためにすぐ何かをしなさい」という声が聞こえたのだ。チベットのことを何も知らなかった彼女は図書館にこもって調べ、悲惨な歴史と現実と衝撃を受ける。「絵を描くことでチベットの役に立ちたいと強く思いました。私にとって絵は目的ではなく手段。そう気づいて、絵を描くことが心から楽しくなりました」。

それから藤田さんは、個展や講演会などのかたわら、チベット難民の子どもたちのために5冊の絵本を作ってきた。すべてダライ・ラマ^{ダライ}が序文を寄せている。12月に完成した新作『Tibetan Identity』は初めて絵本ではない、エッセイ集。「チベット人の若者たちに自分のアイデンティティについて書いてもらい、まとめました。彼らがチベット人であることを見つけ直す機会を作りたかったのです。寄付金のみで2万部を刷って、インドやアメリカ、ヨーロッパなど世界中に亡命しているチベットの人たちに贈ります」。こうした献身的な活動は当然大変なことも多い。何度もやめようと思ったという。そんなとき思い留まらせてくれたのは、子どもたちの喜ぶ顔とダライ・ラマ^{ダライ}の労いの言葉、そして日本人としてのアイデンティティだ。「私は子どもの頃から外国で育ったことで、アイデンティティが財産であることを早くに学びました。思いやり深い日本人であることを誇りに思っています」。そう言うと、藤田さんはしなやかに力強く微笑んだ。

『不思議な冒険』

ブックス・フォー・チルドレン第1弾。日本語・英語・チベット語で綴られた、自然の大切さを優しく伝える絵本。（序文：ダライ・ラマ法王、リチャード・ギア）

『Tibetan Identity』

恵まれない孤児達に絵本を贈るプロジェクト、ボックス・フォー・チルドレンの最新作第6弾。英語とチベット語で綴られ、2万部全てが寄贈される。

(P.055)

作品、上左より

・楽園

ニューヨークのボタニカルガーデンの桜の木の下で、花びらを浴びながらメディテーションをした後に生まれた作品。

・ブルームーン

フランス、ロワール地方の森である黒猫との出会いから生まれた作品。

・ダッカ

サンスクリット語で「無知」を意味する「ダッカ」。人間の愚かさの源である無知が原因で繰り返される輪廻転生を表している。人が動物の命を食べ、成長し、子供を生み、死んで、また生まれるといった重いテーマを美しく昇華させた作品。

・シェルター

アニマル・ライツ（動物愛護運動）を支援している藤田さんが、「いっそ全ての犬たちをアダプトしたい」と思いながら眠りについた時に見た夢から生まれた作品。

・マヤデヴィ

後にブッダとなるシダッターール王子を生んだのは、マヤという美しい女王。王子を身ごもる前に、女王マヤは白いゾウの夢を見たといわれている。2017年に米国で発売予定の絵本『ブッダ』からの一枚。

rimafujita.com